

Early Modern Secularism? Views on Religion in *Seji kenbunroku* (1816)
近世の世俗主義？『世事見聞録』（1816）の宗教観

『世事見聞録』は、本名不詳の武士、武陽隠士によって1816年に書かれた、社会的諸悪を
広範に批評した書である。この書からの引用はしばしばなされるが、少しでも掘り下げた研
究となるとほとんど行われてこなかった。本論は、『世事見聞録』の「僧侶」に対する厳し
い批判を分析し、日本で「宗教」という概念が導入される以前の、近世の宗教理解に光を当
てようとする試みである。江戸時代の多くの学者は聖職強権主義にたいする反撥は共有して
いたが、武陽はそれだけに留まらず、すべての「道」は本質的に腐敗しているか、道徳主義
で上辺を装ったものにすぎないと、徹底した批判を展開している。彼の言説には、世俗世界
が宗教領域に制限を加えるといった趣があり、その点、近代の世俗性概念を思わせるもの
がある。武陽の思想は独創的というよりも、むしろ江戸後期の多くの人々の考えを代弁して
いると見るべきであろう。宗教と世俗という対概念が出来たのは近代のことだと思い込んでし
まうと、この時期の民衆の宗教観を見誤ってしまう。世俗主義的な考え方は近代以前にす
でに社会に存在していたのであって、それはタラル・アサドやチャールズ・テイラーたちによ
って広められた、世俗主義はコロニアリズムによって世界中に輸出された西洋史の産物であ
るという考えに対する反証になっている。本論は、『世事見聞録』及びその類書の分析によ
って、日本では近世においてすでに非西洋的な世俗主義が定着しており、それが19世紀後
半に流入してきた西洋近代の世俗主義を受容する上で大きな影響を与えたに違いないことを
論じた。

The Buddhist Faith of the Japanese Imperial Family after the Meiji Restoration 明治維新後の皇室における仏教信仰

本論は、宮廷が東京に移され神仏分離令が制定された後も、特に皇后や他の皇族にあって仏教信仰が保たれていたことを論じたものである。1877年以後皇室の全員が、皇祖を祀る神道の儀式を、少なくともその形式だけでも執り行わなければならなくなった。しかし個人的領域では仏教を信仰しても問題はなかった。そして1883年に復興された泉涌寺が、京都御所に在位したすべての天皇の菩提寺として新たに指定された。さらに1897年の英照皇太后、そして翌年の晃親王の葬儀は、仏教の密儀に則って行われた。また東京の新皇居においても、皇后の個人的な念仏信仰が変わることなく続いたことも明らかである。

Japanese Archives: Sources for the Study of Tokugawa Administrative and Diplomatic History
日本の史料保存：徳川幕府の行政・外交史研究の典拠

日本の史料保存は、西洋の豊かなアーカイブと比較すると格段に見劣りがする。江戸幕府関連の史料は、元々保存状態が劣悪であった上に、明治維新、及び1923年の関東大震災で多くが失われた。各藩の史料保存状況は、一般的に幕府に比べればずっと良好であったものの、その史料の多くは、原典が廃棄される前にそこから抜き書きされて抜粋部が残った日誌・日記の類いである。最終意思決定の文書、及び老中や奉行所関連の文書のほとんどは、当該役職者が私的に保管する習いであった。老中を務めた大名保有の記録がどれだけ保存されるかは、その藩の歴史意識の何如に依存した。旧大名所蔵の史料の調査は、幕末期雄藩の役割に関する客観史料を発掘・保存したいという動機によって弾みがついた。奉行、及び下級官僚が所有する文書は、藩の記録所に保管されていない場合は、彼らの子孫が伝世していたり、コレクターや書写業者や古書肆が偶然の経路で入手したりした場合に限って残ったのである。江戸時代の行政は、文書の写しを回覧することによって運営されていた。そうした写しが、さらに公的ないし私的に複写されて纏められることもよくあった。公的編纂の例には『通航一覽』がある。1860年代に、その少し前の時期ないし同時代の記録が是非とも必要とされることになって『通信全覽』と『続通信全覽』が編まれた。史料が分散して保管されていることは歴史学が最初にぶつかる問題であったが、分散によって史料が紛失を免れ、時間をかければ復元が可能になることもあった。大阪で散在していた大量の雑文書が明治後期に集められたことがあり、1911-1913年に『大阪市史』が、そしてそこからさらに60年をかけて1960年代に『大阪商業史資料』が出版された。日本で最初に印刷された4編の編纂史料は、勝海舟が明治政府の支援を得て出版したものである。その次に出たのが1911年の『幕末外国関係文書』で、これは部分的に『通信全覽』に依拠している。浩瀚な『大日本維新史料』は、1880年代の旧大名の発企に始まり、主として藩所蔵の史料に拠りながら、1938年に第一編の上梓に漕ぎ着けた。10巻からなる大蔵省編纂の『日本財政経済史料』（1921-1925）は、大蔵省が1871年に前代から引き継いだ史料の少なさを物語っている。

Rising Up and Saving the World: Ishii Jūji and the Ethics of Social Relief during the Mid-Meiji Period (1880–1887)

立身出世と救世：石井十次と明治中期（1880-1887）の社会福祉倫理

明治の児童福祉活動家石井十次（1865–1914）の実践は、欧米の社会的福音運動、児童福祉運の影響を受けたものだというのが伝記作者や歴史家たちの間での通説である。本論は、そうした欧米の一定の影響は認めた上で、石井の思想と活動の中でこれまで看過されてきたある根本的な面を指摘した。それは、石井の児童福祉の大きなビジョンに活力を注ぎ続けたのが、18世紀日本の種々の倫理思想、及び幕末期・明治初頭の革命的な社会行動モデルだったということである。本論は、彼が1882年から1887年にかけて書いた雑誌記事に焦点を当てながら、江戸時代後期と明治初期の理論や批評によって、慈愛心、貧しさ、若さの可能性といったことについて様々に織りなされた知的空間の中で、石井がどのようにして自らの進むべき概念的方向を見いだしていったかを検討する。

How “Religion” Came to Be Translated as *Shūkyō*: Shimaji Mokurai and the Appropriation of Religion in Early Meiji Japan

“Religion”の訳語が「宗教」となった経緯：島地黙雷と明治初期の日本における宗教概念の取り込み

日本における近代的概念としての「宗教」の研究は、西洋起源を強調するのが常である。それに従えば、日本で使われるようになった「宗教」という言葉は、キリスト教的（より厳密に言えばプロテスタント的）“religion”概念における、何を以て宗教（及び非宗教）となすかの基準を借用したものだということになる。しかしなぜ「宗教」という言葉が“religion”の定訳となったかは、西洋だけでは説明がつかず、日本内部の経緯に目を向けなければならない。それには、明治最初期の宗教についての議論—西洋の宗教概念とほぼ無縁の仏教的な作家たちが日本の諸問題を論じた議論—に着目するのがよい。1870年代中期までの明治政府の宗教政策は、神祇官及び教部省の神道派の意向が重きをなしており、仏教に傾倒した特に浄土真宗系の作家たちは、その意向に添うように宗教、及び宗教の国家に対する関係を理論化した。その中で最も著名なのが島地黙雷で、彼は国家と宗教の分離を強調したのみならず、宗教概念自体にそれを反映させようとした。それが最終的に西洋の“religion”に相当する「宗教」という言葉が生れる背景となる。本論の後半では、その出自を系図的にたどってみた。その作業を通じて、明治初期の仏教的作家たちの宗教を定義しようとする主要な動機が、西洋文化の顰に倣うというのではなく、近代日本の中に神道の役割をどう収めるかという純粹に内向きな関心にあったことが明らかになる。

Japanese Philosophers Go West: The Effect of Maritime Trips on Philosophy in Japan with Special Reference to the Case of Watsuji Tetsurō (1889–1960)

日本の哲学者の西航：西洋への航海が日本の哲学に与えた影響-和辻哲郎を中心に

1860年から1960年まで、日本の知識人たちは最新の学問を摂取すべくヨーロッパへ行くのが習いであった。哲学者も例外ではない。洋行は、象牙の塔たる帝国大学における自らの地位に正統性を賦与するための知的・制度的義務であった。その意味で、和辻哲郎（1889–1960）の『風土』は、彼の滞欧経験（1927–28）の産物として考えてみる価値がある。『風土』は、ちょうどその頃発表されたハイデッガーの『存在と時間』（1927）とディルタイの全集第7巻の『精神科学における歴史的世界の構成』（1927）に感化を受けている。和辻の歴史観は、ハイデッガーの歴史観にある「死への存在」を、ディルタイの息吹を受けた「生への存在」に転換したものになっている。

和辻はまた、日本文化のモンスーン気候性、ヨーロッパ文化の牧草地性、そして日本とヨーロッパを隔てている砂漠地帯の乾燥性を比較しながらそれぞれの特性を論じた。和辻の人間と風土の因果関係は、マルクス思想に対する和辻の返答にもなっている。彼はマルクスの「疎外」の理論に対するに、ハイデッガーの「用具存在」と、回復された「共存在」の思想を以てし、それによって彼自身の“Sittlichkeit”、すなわち理想的共同体の倫理性についての思想を展開した。本論は、和辻の西航がどれほど彼の思想に影響を与えているかを明らかにしようとしたものである。西洋に向かう途中の寄港先で見たそれぞれの土地の特異さは、彼の直感的な観察眼を刺激した。旅先から日本の妻子に送った多くの手紙には、後に『風土』のモチーフとなるものが胚胎している。『風土』は、時代遅れの気候決定論の典型として切り捨てるのではなく、日本の哲学が戦前の日本における学問分野として確立されていく上で、どのような歴史的、空間的条件があったのかを知る一つの手がかりとして考察する価値を有している。

Diaries and Everyday Life in Colonial Taiwan 植民地時代の台湾における日常生活と日記

日記というメディアを通すと、日常生活の中にある「近代」がよく見えてくる。このところの日記に対する人気の高まりは、日常生活に対する学問的関心の高まりを受けている。われわれの世界は、日常生活の中に存するのであって、その外にあるのではない。われわれの知っている日常生活は理想からほど遠いものにすぎない。しかし多くの人がそうしているように、日常生活を言説から排除してしまうと、言説空間に問題性が浮かび上がってくる契機が失われ、よりよい未来に向けての対抗言説が生まれなくなってしまう。

本論の第一節では、「日常生活としての日記」という観点から、植民地時代（1895–1945）の台湾の日々がどのようなものであったかを例示的に描く。第二節では、ケース・スタディとして内海忠司を取り上げ、彼の日記を読むことによって、内海のプライベートな生活、家族、余暇、日本統治時代の台湾での人間関係がかなり明確に浮かんでくることを例証する。第三節では、新しく出版された二人の台湾人のエリート、張麗俊と林獻堂の日記に拠りながら、日本統治下の台湾という時代背景の中での二人の日常を観察する。これらの日記は、内海の日記には見られない情報を含んでおり、日本統治時代の台湾の歴史を再構築するためのきわめて重要な原資料である。台湾研究の方法として日記を発掘利用することが頻繁に行われるようになった背景には、ポスト戒嚴令世代のアイデンティティー模索の夢と不安がある。そこには、「国民的」アイデンティティーの構築がほとんど不可能に思える現在の台湾の置かれた状況が反映している。

REVIEW ARTICLE Origins of Japan—the ‘Big Picture’ Revisited: A Review of New Plate Tectonics Research

〔書評論文〕 日本列島の起源-「新しい概論」再考：新プレートテクトニクス研究の批評

この書評論文は、主に G.L. バーンズの 2003 年と 2008 年の *Japan Review* 掲載論文と、2009 年と 2010 年に『地学雑誌』に掲載された日本のプレートテクトニクスの「新しいパラダイム」についての一連の論文を比較したものである。目的は、*Japan Review* の論文以降明らかになった知見を加えて最新のものにすること、次に衝突テクトニクスと付加テクトニクスについて、異なる学問領域（アルプス地質学と沈み込み帯地質学）の研究者たちの解釈に対し問題点を指摘することである。本論は先行論文を敷衍したもので、地質学のかかなり専門的な議論となっており、前二論文の理解が前提となっている。

日本の地質学者たちは、沈み込み帯で生じている地質学的変動を測定し解釈する新しい方法の発見に向けて進みつつある。日本列島は 27 の地質帯からなり、4 つの異なるプレートの動きに影響される。2 つの海洋プレートが陸地の下に沈み込み、陸地自体も 2 つの大陸プレートの動きに応じて按配される。5 億年前からの日本列島形成の歴史は、一般的にも学術理論的にもきわめて興味深いものだが、公式の教科書では十分な説明がなされていない。日本語で書かれた『地学雑誌』のような科学雑誌の論文と、英語で書かれた著名な地質学研究誌の論文の両者の知見を統合した、行き届いた解説が求められている。今の日本の火山活動や地震の原因が、プレートの沈み込みにある以上、それを理解することは災害対策上非常に重要な背景知識となる。

新しい研究としては、付加複合体の堆積物に対するジルコン年代測定、マントル内の「第二大陸」形成、構造侵食／付加の交代を紹介した。